

『今昔物語集』 天竺・震旦部および本朝仏法部の副助詞ダニ

——院政期における〈相対的輕少性〉の意義の一確認——

田 中 敏 生

抄 録

『今昔物語集』の天竺・震旦部および本朝仏法部から副助詞ダニの用例を取り上げて、この語の基本的意義を〈相対的輕少性〉に求めるといふ観点から、その使われ方の記述を試みる。即ち、①願望表現、②仮定条件句、③否定述語、④類推表現の、四つの用法に大別しつつ、各々の用法で基本的意義の發揮されるありさまを観察する。それによって、各用法を通じて〈相対的輕少性〉の意義の保たれていることが確認される。

キーワード…今昔物語集 副助詞 ダニ 院政期 相対的輕少性 加納協三郎

はじめに

本稿は、『今昔物語集』の天竺・震旦部および本朝仏法部に見える副助詞ダニの用例を取り上げて、この語の基本的意義を〈相対的輕少性〉に求めるといふ観点から、その使われ方の記述を試みるものである。

『今昔物語集』のダニについては、夙く加納協三郎氏の調査がある（文献②）。それは、鎌倉期の説話・史論・軍記などをも資料群とするところの、極めて大がかりなものであったが（注①）、そこには次の三つの環境論的な観点が見られた。

A…成分単位での環境論…附属する成分の種類如何、及び格助詞との先後関係

B…文（句）単位での環境論…述語の種類如何（未確定を表わすか確定を表わすか）

C…文章単位での環境論…訓読語的か和文語的か

このうち、Aは副助詞という語類の創設者である山田孝雄以来のものである（文献③、五八九―五九六頁）、またCは「訓読語性―和文語性」という対項による文章様式の解明を行なうに際して注目されるものであるが（文献④）、論者が最も強く関心を抱いたのは、Bであったと思われる。万葉集にあって、ダニは未確定（否定を含む）を表わす述語に用いられるのに対して、スラは確定を表わす述語に用いられることが、加納氏自身によって明らかにされていたが（文献①）、そうした区別が院政・鎌倉期においてどのように保たれているか（あるいは保たれていないか）を闡明することが、調査の眼目をなしていたと考えられるからである。

本稿では、このBの環境論に対して、いわば本性論として、この語の基本的意義を〈相対的輕少性〉に求めるといふ観点に立ちつつ、再調査を試みる。即ち、ある文中でダニが使われるとき、この語の接する語句が、想

定される他の大きな要素に較べて、相対的に小さな要素であることを自身の意義において示すと考えた上で、それが、この語の総ての用例において認められるかどうかを確かめようとする。そしてもしそれが認められるならば、この語のふるまい方を意義の面から統一的に捉えることになるであろうし、ひいては、スラとの違いを考える上でも、この観点からの一方の足場を固めることになるであろう。

以下では、右のような考え方のもとに、天竺・震旦部および本朝仏法部のダニ凡そ五〇例を、各部ごとに検討する。それによって明らかになることとがらを予め結論的に言うならば、〈相対的輕少性〉というこの語の基本的意義が、すべての用例において確かめられることになるであろう。

I 天竺・震旦部のダニ

天竺・震旦部には、合わせて十一例のダニが見える。これを用法ごとに分けて示すと次のようになる。以下この順に検討する。

- | | |
|---------|----|
| 1…願望表現 | 二例 |
| 2…假定条件句 | 一例 |
| 3…否定述語 | 四例 |
| 4…類推表現 | 四例 |

〔合計 一一例〕

第一に、願望表現とともに用いられたダニは二例見える。ここで願望表現というのは、命令・意志・希求など、実現を願う気持ちを表わす様々な言い方を広く指す。

一般に願望表現ではたらくダニは、願望にまつわるある要素に附属することによって、その内容が、より大きなものに較べて相対的に小さなものであることを示す。それによって、願望表現全体としては「せめてもの願い」を表わすことになる。所謂「最低限願望」(文献③、三七頁)の表現

である。〈相対的輕少性〉の意義が、そのように發揮されるのだと言えよう。そしてそれは、次の例においても当てはまる。

- ①〔I冊・三七一頁〕(卷四・三五話)《〔前略〕我レ母ニダニ速ク行テハ告ム》ト思テ走り行ク。》

②〔I冊・三七八頁〕(卷四・四〇話)《我レ一人ノ子ヲダニ設テ便ト為ム》①は、息子が死んでも平然としている父親を見て呆れた比丘の思い、②は貧しい女の望みを述べたものである。いずれも、「父親がだめならせめて母親にだけでも処置を促そう」「裕福になれないなら、せめて子供だけでも授かるう」といった意味で、「せめてもの願い」を表わす。そのような形で、〈相対的輕少性〉の意義のはたらくありさまを観察することができるわけである。

第二に、假定条件句で用いられたものが一例見える。一般に假定条件句ではたらくダニは、条件内容に関わるある要素に接することによって、その中身が、想定される他の大きな要素に較べて相対的に小さなものであることを示す。それによって、条件句全体としては、僅かにこの条件が満たされるならばそれだけでも十分に後件が成り立つといった意味を表わす。そうした意味で、最低十分条件の構成にはたらくと言うことができよう。このあり方は、次の例においても十分に認められる。

- ①〔I冊・四六一頁〕(卷五・二五話)《〔前略〕有ツル所ヘダニ行着ナバ、事ニモ非ヌ事也》ト云ヘバ、亀前ノ如ク背ニ乗セテ本ノ所ニ至ヌ。》

右は、猿の生き肝の話であり、猿は、岸の木の枝に肝を忘れてきたと言つて亀を岸へ引き返させようとしている。「肝を手に入れる」ということが成り立つためには、「元の所へ着く」という、僅かにこのことが満たされるならば、それだけで十分だとの意が表わされている。〈相対的輕少性〉の意義が、そのように供されているのだと言えよう。

第三に、否定述語とともに用いられたダニは、次の四例である(④の「難し」も、否定に準ずる述語として扱った)。一般に否定述語とともに用い

られる場合、ダニは、否定される事柄をめぐめるある要素に接することによって、その自身が、考えられる他の大きな要素に較べて、相対的に小さなものでしかないことを示す。否定表現全体としては、そのような小さな要素をしも斥けることによって、皆無性を表わすものとなる。〈相対的輕少性〉の意義がそうにはたらくのだと言えよう。次の諸例においても、このことは十分に見て取ることができる。

①〔I冊・三七四頁〕(卷四・三七話)《魚ヲ捕テ食フヲ役トシテ仏法ノ名ヲダニ不聞ズ。》

②〔II冊・三〇二頁〕(卷十・十六話)《其二、何ナル事カ有ケム、其ノ女御參給ケルヨリ後、天皇召ス事モ無ク、御使ダニ不通ザリケレバ、只ツクト宮ノ内ニ長メ居給ヘリケルニ、暫ハ今ヤ今ヤト思ヒ給ケルニ、年月只過ニ過テ、微妙カリシ形モ漸ク衰ヘ、美麗也シ有様モ悉ク替ニケリ。》

③〔II冊・三〇三頁〕(卷十・十六話)《此ク、天皇ノ、召シ人ハ何ガトダニ思シ不出ヌ事ハ、他ノ女御達ノ、此ノ女御ノ形ノ美麗並ビ無ケレバ、可劣キニ依テ、謀ヲ成シテ押籠タリケルニヤ、亦、国広クシテ政滋ケレバ、天皇モ思シ忘ニケルヲ、驚カシ奏スル人ノ無カリケルニヤ、世ノ人極ク怪ビ思ケリ。》

④〔I冊・四五八頁〕(卷五・二四話)《〔前略〕汝ハ只此ノ小池一ガ内ダニ難知シ。〔後略〕》

①は、「執師国」の国柄を述べたものである。信仰の実質的な営みに較べて、「名」はその単なる符牒に過ぎない。ダニは、そのような要素の輕少性を示すのに用いられている。最終的にはそれと否定とが組み合わさることによって、「仏教による教化の皆無性」を表わすものとなっている。

②③は、玄宗帝に召された女性が上陽宮で空しく時を過ごすありさまを述べている。②の「使い」の来ることは、直接召されることに較べるならば、代用的で間接的なものに過ぎないし、③の「召シ人ハ何ガ」も、是非

とも会いたいとか、直ちに呼び寄せようといった思いに較べるならば、その関心度はきわめて低い。ダニは、そのような要素に接することによって、「繋がり皆無性」や「関心の皆無性」を表わすものにはたらくと言えよう。

④は、亀の見聞しうる範囲の狭さを言う鶴の言葉である。「小池の中を知ること」は、自由に空を飛んで見はるかす世界に較べれば、ごく微少な範囲に過ぎない。ダニは、そうした意味での輕少性を示しつつ「難し」と組み合わせることによって、いわば「知ることの準皆無性」を表わすものになっていると言えよう。〈相対的輕少性〉の意義が、そのようにはたらくわけである。

第四に、類推表現とともに用いられたダニとしては、次の四例を挙げることができる。ここで類推表現というのは、 $A \cdots X \parallel B \cdots Y$ という比例関係(但し $A \wedge B$)の成り立つことを前提に、 A における X のありようから、 B における Y の大きさを類推する言い方のことである。たとえば「子供でも知っているのだから、まして、大人が知らないわけがない」といったふうにある。この「 $A \cdots X$ 」にあたる事柄を基盤事態と呼び、「 $B \cdots Y$ 」にあたる事柄を類推事態と呼ぶならば、ダニは、小なる要素においてももの事柄の成立を言うことで基盤事態の形成に参加する。これを踏み台として類推事態が引き出され、両者相俟つて類推表現が形作られるわけである(類推表現の下位区分については、第II節参照)。こうしたあり方は、次に掲げる諸例にあつても、十分に認められるであろう。

①〔I冊・三九頁〕(卷一・一二話)《〔前略〕末々ヘノ御弟子ダニモ人ノ謀ニ計ラルベキニ非ズ。何況ヤ、仏ノ智恵ハ無量キ事也。〔後略〕》

②〔I冊・一六八頁〕(卷二・二八話)《〔前略〕不知ズヤ、釈種ハ善法ヲ修行シテ一ノ虫ヲダニ不殺ズ。何況ヤ人ヲヤ。〔後略〕》

③〔I冊・九七頁〕(卷一・三八話)《如此ク現ニ眼ヲ開キ、足手ノ出来タラムダニ貴カルベキニ、皆果ヲ証テ羅漢ト成テ仏ノ御弟子ト有ケリナム語リ伝ヘタルトヤ。》

④〔丁冊・四四五頁〕（卷五・一九話）《（前略）少シヲ分テ与フルヲダニ

糸田無シト思フニ、何デカ半分ヲ得トハ被云ル、ゾ。極テ非道ノ事也》

①は、父が仏様を毘に掛けようとするのを知った子供の言葉である。「仏様の弟子たちであっても騙すことはできない、ましてお釈迦様は云々」との謂であろう。計略が無効となる要因をより少なくしか備えない要素を示すのにダニが用いられている。それによって、類推の基盤となる事柄が整えられるわけである。述部の「非ず」は否定表現であるが、ここでは、「だますことができない」という否定的な事柄全体をめぐって、その成り立ちやすさの度合いが問題にされている。そうしたあり方において、類推の基盤事態形成に参加しているのだと言えよう。

②は、流離王の軍勢を殺傷する奢摩という人を諫める釈種（釈迦族の人）の言葉である。釈種は人を殺めるようなことは断じて行なわないむね説いている。傷害を受ける対象として「虫」が人間よりも小さな要素であることは明らかであろう。そのような要素においてしも「殺さず」ということが成り立つことを言うことで、類推の基盤となる事柄が形成されている。〈相対的輕少性〉の意義が、そのように発揮されるわけである。

③は、目をくりぬかれ手足を切り落とされた五百人の群賊が仏の名号を唱えることによって元の身となり仏道に帰依したという話の結尾部分である。体が元にもどただけでも有難いの、そのうえ羅漢にまでなったという事の運びを述べている。後半部分は事実だけを記すが、身体的なもの以上に貴いものとして評価していることは明らかであろう。この例では、「何況」といった昂進性の明示にはたらく言葉はもはや見えないが、類推表現としてのありよう自体は、はっきりと認めることができる。ここでもダニは、貴ぶに価する要因をより少なくしか備えない要素を掲げるのに働くと見えよう。それによって類推基盤事態の形成に与るわけである。

④は、助けた男に財産を少し分け与えたところ、もっと欲しいと求められて憤る男の言葉である。少しあげただけでも過分だのに半分よこせとは

何か、との趣意であろう。ここでもダニは、理不尽さをより少なくしか備えない要素を示すことで、類推の基盤となる事柄を形作ると言えよう。

以上の検討から、天竺・震旦部のダニにあつては、それぞれの用法において、輕少な要因の提示にはたらくありさまが觀察されるであろう。そのような形で〈相対的輕少性〉の意義が発揮されるわけである。

Ⅱ 本朝仏法部のダニ

本朝仏法部にはダニが三十九例見える。今その内訳を、天竺・震旦部と合わせて示すと、次のようになる。以下この順に項を分かつて検討する。

	天竺・震旦部	本朝仏法部
1.. 願望表現	二例	八例
2.. 仮定条件句	一例	二例
3.. 否定述語	四例	一七例
4.. 類推表現	四例	一二例
〔合計〕	一一例	三九例

(1) 願望表現

第一に、願望表現とともに用いられるダニは八例見える。願望を表わす形式の面から分けると、次のようになる。

イ.. 命令形	三例
ロ.. む	四例
ハ.. ばや	一例

まず、イ..「命令形」を末尾に持つものは、次の三例である。

①〔IV冊・一三五頁〕（卷十九・八話）《子共ハ皆死ヌレバ妻ヲダニ残セカシ》ト悲シク見居タル程ニ、》

②〔IV冊・二三三頁〕（卷二十二・二話）《（前略）此ノ度ダニ、渡ラム人必

ズ引キ留テ援ゼヨ」ト。》

③〔Ⅳ冊・二二四頁〕(卷二十・二話)《尚此ノ度ダニ念ジテ、渡ラム人ニ取り懸リ給ヘ。(後略)》

①は、鷹狩りによって攻められる雉になった夢を見た鷹匠が、夢の中で太郎・次郎・三郎と次々に自分の子供たちを狩り獲られたときの思いを述べたもの、②③は、震旦から渡ってきた天狗に、今度こそうまくやれ(通る人に危害を加えよ)と勧める日本の天狗の言葉である。「子供が駄目なら、せめて妻だけでも活かしてほしい」「今までは失敗したが、せめて今度だけでもうまくやれ」といった意味であって、いずれもダニは、接する語句の軽少要因性を示すことで、十全な状態から大きく引き下がった願いのありようを表わすのに用いられている。そのような形で「相対的軽少性」の意義はたらくのだと言えよう。

次に、ロ・「む」とともに用いられたものは、次の四例である。

④〔Ⅲ冊・五二三頁〕(卷十六・二七話)《屍ヲダニ見ム」ト祈リ請。》

⑤〔Ⅳ冊・二五二頁〕(卷十九・二三話)《前略》今ハ此ノ生ノ事、益無

キ身ニ候メレバ、「後生ヲダニ助ラム」ト思ヒ給(たまへ)テ、「出家シ候ナム」ト思給ツルニ、(後略)》「宇治拾遺・一四八話にも《後生をだにいかでとおぼえて》とあってダニが見える。新大系三〇五頁。文献⑤・八〇頁。古本・上・四〇話にも《後生だにいかでとおぼえて》とある。新大系・四四六頁〕

⑥〔Ⅳ冊・一九〇頁〕(卷十九・二九話)《前略》「御送ヲダニセム」ト思テ、御船ニ副テ行ク間ニ、(後略)》

⑦〔Ⅳ冊・二九五頁〕(卷二十・三六話)《檀越ノ返ラムヲダニ待テコソハ申シ畢メ」ト思フ程ニ、》

④は、行方不明になった良藤のために観音様を作って祈る家族たちの願いを述べたもの、⑤は、即興の歌で御衣を賜った侍の出家の志、⑥は、山蔭中納言に助けられた亀が夢に現われて恩返しの際緯を語る言葉、⑦は、

貪欲な国の守のために説経を中断された講師の思いである。「もう死んでいるなら、せめて屍だけでも見たい」「現世はだめだが、せめて後生だけでも助かりたい」「これといった恩返しができなくても、せめてお見送りだけでもしようと思つて」「中断はしかたがないが、せめて施主が帰のを待つてやり遂げよう」といった意味を表わすものであつて、これらにあつてもダニは、願望内容にまつわる要素の小なるあり方を示すことで「せめてもの願い」を表わすのに与ると言えよう。

さらに、ハ・「ばや」による願望表現で用いられたものが一例見える。

⑧〔Ⅲ冊・五四六頁〕(卷十六・二八話)《前略》「皮ヲダニ剥バヤ」ト思ヘドモ「剥テモ旅ニテハ何ニカハセム」ト思テ、守リ立テル也」ト。》「宇治拾遺九六話でも《皮をだにはがばや》とあってダニが見える。新大系・一八八頁。文献⑤・八〇頁。また古本・下・五八話にも《皮をだに剥がばや》とある。新大系・四八〇頁。なお宇治拾遺では《見たに」もかへらず》と、もう一つのダニも見える。同・一八九頁。文献⑤・八四頁。古本にも《見たに」も返らず》とある。同・四八一頁〕

⑧は、例の藁しべ長者の話である。上等の馬が交易しないままに死んだのでせめて皮を剥ぎたいがそれもままならないことを下男が語っている。ここでもダニは、これまでと同様ののはたらき方をしていると言えよう。

こうして、願望表現で用いられるダニにあつては、願望内容にまつわる軽少要因性を示すというあり方において、自身の意義を発揮するありさまが観察されるであろう。

(2) 仮定条件句

第二に、仮定条件句の中で用いられているのは、次の二例である。

①〔Ⅲ冊・一八〇頁〕(卷十二・三五話)《験ダニ有ラバ、何ナリトモ有ナム」ト被定テ、藏人□□(原文欠字)ヲ以テ召シニ遣ス。》

②〔Ⅳ冊・三二二頁〕(卷二十・四六話)《前略》只我が任ニハ、田畠ヲ

ダニ多ク作タラバ、国人ノ為ニモ可賢シ。(後略)』

①は、円融天皇の邪氣を払うのに睿実という人に加持を頼むかどうかの評定をしている場面である。身分や人柄といった他の要因を捨て去って、「効き目がある」という僅かな事項へと依頼の要件を引き下げるのにダニが用いられている。そうしたあり方で〈相対的輕少性〉の意義のはたらくありさまが見て取れよう。

②は、能登の守の国の経営方針を述べている。国内巡視に際して接待や引き出物等の氣遣いは無用であって、作物をよく稔らせることだけを心掛ければ、人々にとっても都合なはずだとの趣意である。ここでもダニは、他の要素を捨て去って、ごく僅かな条件が満たされればそれだけで十分だという意味を表わすのに用いられている。〈相対的輕少性〉の意義において、それがなされるわけである。

(3) 否定述語

第三に、否定述語とともに用いられたダニは十七例見える。以下では、ダニの接する語句の輕少要因性を、大きく二つに分かつて見て行く。

まず、次のような例では、ダニの接する語句自体に「小」なる要素としてのあり方が明瞭に備わるであろう。

〔一正〕

①〔Ⅲ冊・五四五頁〕(卷十六・二八話)《〔前略〕其ノ直一正ダニ不取シテ止ヌ。(後略)》〔古本・下・五八話にも《一正をだに取らせ給はずなりぬ。》とあって、ダニが見える。新大系・四八〇頁〕

〔かばかり〕

②〔Ⅳ冊・二三三頁〕(卷二十二話)《遙ニ震旦ヨリ飛ビ渡テ、此許(かばかり)ノ者ヲダニ引キ不転(くるべかさ)ズシテ過ツル、糸幣(つたな)シ。(後略)》

〔夢〕

③〔Ⅲ冊・五一八頁〕(卷十六・二八話)《一夜籠レルニ、夢ヲダニ不見ズ。》

④〔Ⅲ冊・五一八頁〕(卷十六・一八話)《〔前略〕石山ニ參テ三日三夜籠

ツルニ、聊ノ夢ヲダニ見セ不給ネバ、可然キ事ト思ヒ歎テ罷リ返ル也》

⑤〔Ⅲ冊・五四八頁〕(卷十六・二九話)《日来籠テ候ヒケレドモ、夢ヲダニ

ニモ不見ザリケレバ、歎キ悲ムデ返ニケリ。》

〔蠅〕

⑥〔Ⅲ冊・三九七頁〕(卷十五・一五話)《其ノ房ノ辺ヲバ蠅ヲダニ翔ラセ

ズシテ、清尋人ヲ追ヒ唳ル。》

⑦〔Ⅳ冊・一二二頁〕(卷十九・四話)《蠅ヲダニ不翔ズシテ、明ヌレバ》

〔鳥の音〕

⑧〔Ⅲ冊・五六四頁〕(卷十六・三六話)《〔前略〕人ノ跡絶テ鳥ノ音ヲダニ

ニ不聞ズ。只極テ怖シ氣ナル鬼神ヲノミ見ル。(後略)》

〔跡〕

⑨〔Ⅳ冊・二四三頁〕(卷二十・一〇話)《驚キ怪クテ、強ニ搜ト云ヘドモ、惣テ頭ノ髪ヲ搜ルガ如ニテ、露跡ダニ無シ。》

〔返事〕

⑩〔Ⅲ冊・五一五頁〕(卷十六・一八話)《女心強クシテ、「吉トモ悪クト

モ我が夫ヨリ外ニ人ヲ可見キ事ニハ非ズ」ト思ヒ取テ、守ノ文ヲ遣ケル返事ヲダニ不為ザリケリ。》

①は、藁しべ長者の話である。上等の馬が死んでしまつて何の利益にもならなかったことを語っている(このあと願望表現⑧の「皮ヲダニ剥バヤ」へとつながる)。一が自然数の中で最も小さなものであることは言うを俟たない。ダニは、そのような要素を挙げ示しつつ否定と組み合わせること、で、「利益の皆無性」を表わすのにはたらくと言えよう。文献⑫にいわゆる「弱数量叙述」にあたる云い方である。

②は、震旦国からやってきた天狗が僧を襲おうとしてかえつて怖じ恐れて退散したのを日本の天狗が笑う言葉である。ダニが接する語句の輕少要

因性は、「かばかり」によって示されている。ダニもまた、このあり方を明示することで、「成果の皆無性」を表わすのに加わるわけである。

③④と⑤とは、どちらも観音様の御利益を期してお寺に籠もる話の一節である。夢のお告げは、その中身がどのようなものであれ、そこからこそ現実の事象が展開してゆくための第一歩をなす。その意味で端緒としての軽少性を帯びる。ダニもまた、そのような要素を掲げつつ否定と組み合わせること、「御利益の皆無性」を表わすと言えよう。

⑥は、伊予国に渡った清尋が恭敬されているありさまを述べたもの、⑦は多田の満仲の身辺警護の嚴重さの叙述である。文脈は異なるが、「蠅」は、それぞれに軽少要因性を担う言葉として持ち出されている(注②)。ダニもまたそれを明示することで、「近寄るものの皆無性」を表わすのに参加している。

⑧は、あの世へ行きかけて蘇った人が、三途の川へと向かったときのありさまを語る言葉である。見知らぬところを行く者にとつて、鳥の声などというものは、同じ人間に較べるといかにも頼りない。ダニはそのような要素を掲げつつ否定を受けることで、「安堵要因の皆無性」を表わすのに与ると言えよう。

⑨は、奥州への旅の途次に泊まった家で男たちが大切な一物を失う話である。本体とその痕跡といった対を考えれば、「跡」の軽少要因性は容易に了得されよう。最終的には、それと否定とが組み合わせることで、「存在の皆無性」が表わされるわけである。

⑩は、志操堅固な女性が夫以外の男には見向きもしなかったことを述べている。返事というものは、相手の意向を受け入れるにせよ拒むにせよ、意思疎通上の最低限の反応であつて、その意味で軽少性要因を帯びる。ダニもまた、このあり方を示すことで、「つながりの皆無性」を表わすのに与ると言えよう。

他方、次のような例でも、前後の文脈を勘案すれば、ダニの接する語句

の軽少要因性は容易に見て取ることができよう。

〔焦がれたる所〕

⑪〔Ⅲ冊・一五八頁〕(卷十二・三〇話)《怪ムデ灰ヲ搔去テ見レバ、此ノ経ヲ入レ奉レリシ手箱ハ焼テ(※)、経八巻在マス。露ユ焦レタル所ダニ無クテ、灰ノ中ヨリ被搔出給ヘリ。》〔※前話では《此ノ法花経ヲ入レ奉レル筈不焼ズシテ有リ》とあつて箱ごと無事なので「焼デ」とする可能性もあるが、仮に新大系の本文に従う〕

〔知りたる人〕

⑫〔Ⅲ冊・五六〇頁〕(卷十六・三四話)《京ニハ知タル人ダニ無シ。此ノ東渡ニナム候フ》

〔有所〕

⑬〔Ⅲ冊・三六九頁〕(卷十四・四五話)《陽信此ノ僧ヲ勲ニ貴ク思ケレバ、東西ヲ尋ケレドモ、其ノ後、露有所ヲダニ不聞ズシテ止ニケリ。》

〔枕なる刀〕

⑭〔Ⅲ冊・五二三頁〕(卷十六・二〇話)《力有ル人ナレドモ、俄ノ事ナレバ、我ニモ非デ被引ル程ニ、枕ナル刀ヲダニ不取敢ズ。》

〔心経〕

⑮〔Ⅲ冊・三九九頁〕(卷十五・一五話)《(前略)此ノ国ノ人ハ、〔長増のことを〕心経ヲダニ不知ヌ法師ト知タル也。(後略)》

〔その他〕

⑯〔Ⅳ冊・八四頁〕(卷十七・四四話)《僧ハ童ヲ人ニモ不見セズシテ思テ、延〔「縁」ニダニ不出サズシテ、糸珍ラシク心ノ暇モ無ク思フ程ニ、〕
⑰〔Ⅳ冊・一〇三頁〕(卷十九・一話)《ミナ人ハ花ノ衣ニナリヌラムコケノタモトハカハキダニセズノナム云ケル。》〔「」は改行〕

⑱は、火事で家が焼けたけれど法華経は無傷で残ったことを述べる部分である。単に焦げ目の付くことは、焼失することに較べれば、損害の度合いは格段に小さい。ダニは、そのような要素を掲げ示しつつ否定と組み合

わさること、で、「損傷の皆無性」を表わすと言えよう。

⑫は、身の上を尋ねられた時の、無縁の僧の返答である。血縁者や懇意の人に較べれば、単に知っているだけという人の存在感は極めて薄い。ダニはそうした意味での輕少要因性を示す役割を果たしている。最終的にはそれによって「人的繋がり」の皆無性」が表わされるわけである。

⑬は、猖獗を極めた疫病を鎮めたのち、たちまち行方をくらました聖人について述べている。その人の居場所を知ることが、逢つて詳しく話を聞くとといった事柄に較べれば、薄いつながりでしかない。ダニもまたそのような要素を掲げること、で、「交渉の皆無性」を表わすのに与ると言えよう。

⑭は、盜賊に騙されて泊まらされた男が寝ているところを襲われる場面である。枕上の刀を手取ることは、相手を打ち倒すとか追い返すとかいった事柄にとつての、単に準備的な動作に過ぎない。ダニもまた、そうした意味での輕少要因性を示すこと、で、「抵抗の皆無性」を表わすと言えよう。

⑮は、伊予の国をさすらった長増法師の言葉である。般若心経は《最も一般的でごく短い經典》(新大系・脚注)とされる。仏教のイロハとも云うべきものであつて、この点に輕少要因性が備わる。ダニもまた、そのあり方を示すこと、で「仏教的素養の皆無性」を表わすのに与るわけである。

⑯は、貧しい僧がたまたま連れ戻った童を大切にしているありさまを述べている。部屋の外部にあるものとして縁側は殆ど屋内といつてもよいほど近い距離のものであり、この点に輕少要因性が備わる。ダニもまたそのような要素を提示すること、で、「外出の皆無性」を表わすと言えよう。

⑰は、古今歌(八四七・遍昭)の引用である。周知のように、古今では末句「乾きだにせよ」であるが(このダニについては、文献④・一五二頁で扱っている)、ここでは否定述語になつて(なお第三句も「なりぬなり」)。僧衣を華やかな衣服に着替へることに較べるならば、単に袖(涙)が乾くことは、より小さな変化でしかない。ダニは、そのような要素を掲げ示すこと、で、「悲しみから癒されることの皆無性」を表わすのにはたら

くと言えよう(古今歌であり、かつ本文に問題もあるが、ダニのはたき方自体は、このように考えることができる)。

こうして、否定述語とともに「はたらくダニ」にあつては、その接する要素の小さなあり方を示すこと、で、皆無性の表現に与るありさまが觀察されるであろう。そのような形で〈相対的輕少性〉の意義が発揮されるわけである。

(4) 類推表現

第四に、類推表現で用いられたダニは十二例見える。一般に類推表現は、その形の面から、次の三つの小類に分かつことができる(類推表現の基本的事ありようについては第Ⅰ節参照)。

a…典型的類推構文 三例

b…準典型的類推構文 四例

c…暗示的類推構文 五例

即ち、aの〔典型的類推構文〕にあつては、基盤事態と類推事態とがともに示され、かつ「況や・増して」といった昂進性明示の言葉も現われる。bの〔準典型的類推構文〕でも、基盤事態と類推事態とがともに示されるが、昂進性明示の言葉は現われない。そして、cの〔暗示的類推構文〕では、基盤事態だけが示されて類推事態は言葉にされず、単に暗示されるにとどまるわけである。

まず、a…〔典型的類推構文〕で用いられたものとしては、次の三例を挙げることができる。

〔況や〕

- ①〔Ⅳ冊・一五一頁〕(卷十九・二話)《此レヲ思フニ、出家ノ功德ハ今始タル事ニハ非ネドモ、年老テ今日明日トモ不知ヌ翁ノ出家スルヲ例ニ、此ク天衆・地類喜ビ給ヒケリ。何況ヤ、若ク盛ニシテ勲ニ道心発シテ出家セム人ノ功德ヲ可押量シ。》

②〔IV冊・二二頁〕（卷二十一・一話）《廁ノ尻（＝廁から流れ出た水の末）
ダニ猶此ク甚深ノ法文ヲ唱フ。況ヤ此ノ山ノ僧ノ貴キ有様ヲ思ヒ遣ル
ニ、云ハム方無シ。（後略）》

〈増して〉

③〔IV冊・一七七頁〕（卷十九・二三話）《（前略）昔ノ僧正の御時ヨリ伝
ハリノ止事無キ所ヲ、弥ヨ微妙（めでた）ク造リ瑩（みが）キ給ヘレ
バ、外ノ人ダニモ住マ、欲クコソ可思ケレ。増シテ我等ハ此ヲ去テハ、
何クニカハ住マムト為ル》

①は、老人が出家したのを梵天・帝釈など仏法の守護神たちが喜んだと
いう話の結尾部分である。春秋に富む若者に対して老人は余命いくばくも
ないのだから、この点から見ると、出家することの価値は相対的に低いと
も言える。ダニは、このあり方を示すことによって、類推の基盤となる事
柄を形作ると言えよう。

②は、海の水が法文を唱えるのを聞いた天竺の天狗がその源を尋ね求め
て来たところ、比叡山の僧侶の廁の水の流れ出たものであることが解った
時の思いを述べたものである。敬い尊ぶべきありようをより少なくしか備
えない要素を掲げるのにダニが用いられている。そこから、まして僧侶自
身の尊さは云々といったふうに類推が進むわけである。

③は、覺縁律師という立派なお坊さんが、わざわざ不肖の弟子を選んで、
自分の死後もこの寺から離れるなど遺言するのを聞いたときの、他の弟子
達の不満めいた思いである。よそのお寺の人だつて住みたくなるような良
い寺なのだから、我々だつてここを離れるわけではないのに、というわけだ
がある。ここでもダニは、寺に住み付く理由をより少なくしか持たない人た
ちを示すのに用いられていると言えよう。

次に、b.（『準典型的類推構文』）で用いられたダニは、四例見える。こ
こでは、もはや昂進性を明示する言葉は現れないが、類推の基盤となる
事柄と類推される事柄とがともに明示されているところから、類推表現と

してのありようを十分に見て取ることができる。

①〔III冊・四八七頁〕（卷十六・七話）《今日ダニ不思係ヌニ、其マデハ
何ガ可有キ》ト云ヘバ、女、「何ナル事也トモ、今ヨリハ何デカ不仕
ザラム」ト云ヒ置去ヌ。〔宇治拾遺・一〇八話にも《これだに、思ひ
かけずうれしきに、さまでは、いかゞあらん》とあつてダニが見える。
新大系・二二七頁。文献⑤・八九頁〕

②〔III冊・三四七頁〕（卷十四・三五話）《此ノ僧賁シト云フ思エモ無ケ
レバ、若干ノ僧ヲ召ヌニモ無キニ、参テ居タルダニ不得心ズト思フニ、
此召シ有ルハ何ナル事ゾ》〔宇治拾遺・一九一話にも《かく参りたる
をだに、由なしと見あたるをしも、召しあれば、心も得ず思へども》
とあつてダニが見える。新大系・三八二頁。文献⑤・八九頁〕

③〔IV冊・一四三頁〕（卷十九・九話）《（前略）若君其咎ヲ蒙ラセ給ヒシ
ダニモ歎キ思ヒ給ヘ候シニ、程無ク失サセ給ヒタレバ、哀ニ悲シク思
ヒ奉ルト云ヘドモ、申モ愚ニ候ヘバ、（後略）》

④〔IV冊・二四七頁〕（卷二十一・一〇話）《云フ甲斐無キ下臈ノ為ルヲダニ
罪深キ事ト云フニ、此ク為サセ給ヒケルニ、然レバニヤ狂気ナム御マ
シケル。》

①は、観音様の化身である少女が、零落した姫君を助ける話の一節であ
る。美濃から若狭へ行く旅人の一行（その留守居役）に食事を用意してく
れただけでも忝いのに、次の日に若狭から戻ってくる大勢の人たちへの饗
応まで申し出てくれたのを、姫君は申し訳なく思っている。一度だけの援
助は、人数でもそれを上回る二度目の援助を受けることに較べるならば、
心苦しさをもちたらず度合いは低い。ダニは、そのような事柄を指し示す語
句を提示することで、類推の基盤となる事態を形作るわけである。

②は、無名の僧を重篤の基経が呼び寄せたことをめぐる人々の思いであ
る。勝手に押しにかけていただけでもどうかと思われるのに、名指しで招か
れたのでいよいよ不可解であつたむね述べている。不審さをもたらず要因

として、単にそこに参じていることは、わざわざ呼ばれることに較べるならば、相対的に小さい。ここでもダニは、より小なる要因を掲げることによって、基盤事態の形成に与ると言えよう。

③は、大臣秘藏の硯を下男が割つたのを、若君が身代わりになって勘当になったあげく命を落としたことを悲しむ、下男の言葉である。勘当を受けることは、この世を去ることに較べれば、悲しみを惹き起こす要因としてまだしも軽い。ダニは、そのような要素を挙げ示すことで類推の基盤となる事柄を形作るわけである。

④は、杵を犬に変える類いの妖術を滝口の道範が習つたのを、さらに陽成天皇が教わつたことをめぐる世評を述べている。習うに際しては「永く三宝ヲ不信ゼジ」(二四六頁)と誓言するのだから「罪深キ」ことに変わりはないが、下賤の者が修めるのは、一国の元首たる者がそうするのに較べるならば、まだしも酌量の余地がある。そうした意味で、ダニは、軽少な要因を示し掲げていると言えよう。

さらに、c「暗示的類推構文」で用いられたものとしては、五例が見える。これらはさらに、次の二つの小類に分けておくことができる。

イ…基盤事態単独タイプ 一例

ロ…反戾事態提示タイプ 四例

まず、イ…「基盤事態単独タイプ」のものとしては、次の一例を挙げることができる。ここでは、基盤事態だけが示されて、類推事態は暗示されるに留まる。

①〔IV冊・二二頁〕(卷十九・四話)《守〔満仲〕夜ヲ睡(あか)ス程ヲダニ心モト無ク思テ、明マ、ニ、湯浴テ疾ク可出家キ由ヲ云ヘル〔云ハバ〕の誤写か…新大系・脚注》、三人ノ聖人極テ貴ク云テ、勸テ令出家シメツ。》

①は多田満仲が出家を行なうに際して、夜が明けるのも待ちかねるありさまを述べたものである。単に夜が明けるまでの時間は、出家の手続きを

遂げるまでの間に較べれば短い。ダニは、このあり方を示すことによって、出家の成就をいかに心待ちにしていたかを類推せしめるのにはたらいいてゐる。実際の行文では、類推義は読み手の理解に委ねられ、暗示されるに留まる。そうした意味で、暗示的類推構文が形成されていると言えよう。

次に、ロ…「反戾事態提示タイプ」のものとしては、次の四例が挙げられる。ここでは、類推されることがらとは相反する事態のほうが言葉にされる。ここでも、類推事態そのものは前提にされているのだから、これもまた暗示的類推構文の一種と受け止めることができる。

②〔IV冊・一一八頁〕(卷十九・四話)《(前略) 君ノ宣ハム様ハ、「此ノ聖人達ハ公ケ召スニダニ、速ニ山ヲ下ヌ人共也。其レニ、修行ノ次ニ此ニ御シタルハ希有ノ事也。然レバ、此ル次ニ聊ノ功德造テ、法ヲ令説テ聞キ給ヘ。(後略)」ト勸ヨ。(後略)」》

③〔IV冊・一一九頁〕(卷十九・四話)《源賢君、守ニ云ク、「此ノ御シタル三人ノ聖人達ハ、公ノ召ニダニ不参ヌ人共也。而ルニ、思ノ外ニ此ク来リ給ヘリ。此ノ次デニ仏経ヲコソ令供養メ給ハメ」ト。》

④〔IV冊・二四五頁〕(卷十九・一〇話)《長共(おとなども)ニダニ露不令知ヌ事ヲ、幼キ心地ニ心ヤ得ケム、「父ハ我ヲ棄テハ何チ行カムト為ルゾ」ト云テ、袖ヲ引カヘテ泣ケルヲ、》

⑤〔IV冊・二〇四頁〕(卷十九・三五話)《久□〔明記を期した欠字・新大系・本文二〇二頁の脚注〕ハ年七十二成テ風ニ値タラムニヲダニ可擲キニ非ヌニ、此ク擲メテ来タレバ、実ニ希有ノ事也。》

②は、多田満仲を出家させようと画策してせりふの打ち合わせをしている源信僧都の言葉、③は、そのせりふを源賢(満仲の子で僧侶)が実際に発している場面である。これらにあつて、ダニは、「下山しない」ということをめぐって、それが成り立つ要因をより少なくしか帯びない要素を掲げるのに用いられている。そこから「まして普通の人間が頼んでも下山は到底見込めない」といったことがらが類推されるが、実際の行文では、そ

れに背反する事柄が述べられる。そうしたあり方で暗示的類推構文が形作られていると言えよう（ここでは基盤事態に否定述語が用いられている。そうした例は、天竺部の類推表現①②にも見られた）。

④は、藏人宗正が出家しようとしたときに、本能的に娘がそれに勘付いたことを述べている。「大人にだつて一言も言わなかったことを、幼心の直観が感じ取ったのであろうか」との意であろう。後半部分は、「まして子供に言うわけがないのに」といった意味を踏まえての反戻事態提示と見ることができる。そうした意味で、暗示的類推構文が形作られていると受け止めることができる。

⑤は、崖から落ちて腰を折った盗賊を搦め取った老人（久□）のありさまを述べている。「風」は、現在の風邪よりも広い意味で使われるとされるが（新大系・脚注）、要するに病気で弱った女性であつても搦め取ることのできないほど勢力の弱いことを言うものである。この部分だけで考えれば皆無性の表現とも見られるが、後続部分は、「まして盗賊を捕えることなどできない」といった意を踏まえつつ反戻事態を述べていると見ることもできる。そうした意味で、暗示的類推構文と認めることも許されるであろう。

最後に、天竺・震旦部に見えた四例について小類の区分を言うと、①②はaの〔典型的類推構文〕に、③はbの〔準典型的類推構文〕に、④はcの〔暗示的類推構文〕のうちの、ロ…〔反戻事態提示タイプ〕に、それぞれ該当すると言えよう。

こうして、類推表現に参加するダニにあつては、小なる要素においても事柄の成立を言うことで、類推の基盤となる事態を形成するのにはたらくありさまが観察されよう。そのようなあり方において、〈相対的軽少性〉の意義が発揮されるわけである。

むすび

以上、『今昔物語集』の天竺・震旦部および本朝仏法部からダニの用例を取り上げて、その使われ方を見てきた。それによって明らかになった事柄をまとめるならば、①願望表現においては、願望にまつわる要素の小なるあり方を示す事で「せめてもの願い」を表

	願望	仮定	否定	類推	計
天竺震旦	2	1	4	4	11
使用率	18.2	9.1	36.4	36.4	
本朝仏法	8	2	17	12	39
使用率	20.5	5.1	43.6	30.8	
合計	10	3	21	16	50
使用率	20.0	6.0	42.0	32.0	

わすのに加わり、②仮定条件句にあつては、後件成立のために満たすべき要件を最低限とも言うべき段階に引き下げることによつて最低十分条件の構成に与り、③否定述語とともにある場合には、それをしも斥けるものとして小なる要素を示す事で皆無性表現の一翼を担い、④類推表現に際しては、小なる要素においてもの事柄の成立を言うことで類推の基盤となることがらを形成するのにはたらくのであつた。この文献におけるダニは、以上のようであり方において、〈相対的軽少性〉の意義を発揮すると認めることができるであろう。

最後に、用法ごとの用例数と、その各部での使用率とを示すと、【表Ⅰ】

	願望	仮定	否定	類推	計
愚管抄	1	6	13	8	28
使用率	3.6	21.4	46.4	28.6	
宇治拾遺	5	9	19	25	59
使用率	8.5	15.3	32.2	42.4	
十訓抄	3	7	10	12	32
使用率	9.4	21.9	31.3	37.5	
著聞集	1	1	14	9	25
使用率	4.0	4.0	56.0	36.0	
沙石集	2	3	3	13	21
使用率	9.5	14.3	14.3	61.9	
保元物語	0	3	5	6	14
使用率	0	21.4	35.7	42.9	

のようになる。

他方、これまでに調べ得た鎌倉時代の文献についても、同じようなまとめを行なうと、【表Ⅱ】のようになる。注記を施すと、宇治拾遺の合計数には「その他一例」を加えてある。また、十訓抄の合計数には歌四例が含

まれ（願望二例、仮定一例、類推一例）、著聞集の合計数にも歌四例が含まれる（願望一例、否定二例、類推一例）。沙石集の本文は米沢本、保元物語の本文は半井本である（以上、詳しくは文献⑤～⑩）。

これらのうち、願望表現に最も活勢が見られるのは宇治拾遺であるが（十訓抄には和歌の用例二例が含まれている）、それでも割合にして一割に満たない。今昔ではほぼ二割であるのに較べると、減少の傾向がよく見て取れよう（注③）。また仮定条件句での用法は、愚管抄で比較的活勢が見られ、十訓抄（歌を除くと一八・八％）、宇治拾遺などがこれに次ぐ（保元でも使用率は高いが、絶対数は少ない）。そしてそれは、仏法部までとの比較の限りでは、増加の傾向にあると言えよう。

加能論文（文献②、一六五頁）では、鎌倉期に入って願望表現での用法が減り、所謂「未確定事実叙述語連続」の例は、仮定条件句でのものに狭まってゆくむね述べられているが、そうした趨勢は、本稿での調査の限りでも、おおむね認められると言ってよいかと思われる。

もとよりそれは、今昔全体から見れば、その一半でのありように過ぎない。たとえば、仮定条件句での用法は、本朝世俗部では、暫定値で二十五例（率にして三十二・五％）と、大きな活勢を見せる。そうした事柄をも含めてより詳しい観察を進めるためにも、本朝世俗部のダニについて調査を行なうことが必要であろう。

〔付記〕『今昔物語集』の本文は、次の文献に依った。

新日本古典文学大系『今昔物語集（一～五）』（岩波書店、一九九三）

一九九九）

用例の掲出に際しては、次のような行き方を取った。

- ・ 用例の頭に〔冊数・頁数〕を示した。
- ・ それに続けて（巻・説話番号）を示した。
- ・ 振り仮名を（ ）に括って示した場合がある。
- ・ 引用者による注解を（ ）に括って適宜挿入した。

・ 同文的同話についての注記を、用例末尾に（ ）に括って示した場合がある。

今昔については、次の書物も適宜参照した。

（旧）日本古典文学大系『今昔物語集（一～五）』（岩波書店、一九五九～一九六三）

新編日本古典文学全集『今昔物語集（一～四）』（小学館、一九九九～二〇〇二）

今昔以外の作品は、次の書物に依った。

新日本古典文学大系『宇治拾遺物語 古本説話集』（岩波書店、一九九〇）

新日本古典文学大系『平家物語（上・下）』（岩波書店、一九九一～一九九三）

『対校 真言伝』（説話研究会・編、勉誠社、一九八八）

これらの書物の引照に際しては、「新大系」「旧大系」「宇治拾遺」「古本」などの略称を適宜用いた。

注

〔注①〕今昔以外では、『宇治拾遺物語』『古今著聞集』『沙石集』『愚管抄』『保元物語』『平治物語』の六つの資料が扱われている。このうち、『平治物語』を除く五つの資料については、文献⑤及び⑦～⑩で再調査を試みた。

〔注②〕旧大系頭注（第三冊・三六五頁）では、平家巻五・「五節之沙汰」を引照する。《敵の陣には蠅だにもかけり候はず》（新大系・上、三二〇頁）。富士川の合戦で平家が落ちのびたので、陣地がもぬけの殻であることを報告する言葉である。

〔注③〕願望表現の②③、及び否定述語の②は、いずれも同一説話からの引例であり（巻二〇・第二話）、後代の「真言伝」（栄海編・正中二年＝一三二五年）に同文的同話があるが（巻五・二五）、ダニの対

応例は否定述語の分だけであり、願望用法のダニには対応例が見えない（三五七～八頁）。こうしたことも、この傾向と並行する現象であると思われる。

参考文献

- ① 加納協三郎（一九三八）「だに」「すら」の用法上の差異に就て『国語と国文学』一五卷六号
- ② 加納協三郎（一九三八）「院政鎌倉期に於けるダニ・スラ・サヘ」『国語と国文学』一五卷一〇号
- ③ 鈴木ひとみ（二〇〇五）「副助詞サエ（サヘ）の用法とその変遷―ダニとの関連において―」『日本語学論集』一号（東京大学）
- ④ 田中敏生（二〇一二）『古今和歌集』の副助詞ダニ―〈相対的輕少性〉の意義をめぐって―『四国大学紀要』三八号
- ⑤ 田中敏生（二〇一七）『宇治拾遺物語』の副助詞ダニとサヘ―中世説話集における〈相対的輕少性〉〈周縁波及性〉の意義の一確認―『四国大学紀要』四九号
- ⑥ 田中敏生（二〇一七）『十訓抄』の副助詞ダニとサヘ―中世説話集における〈相対的輕少性〉〈周縁波及性〉の意義の一確認（其二）―『四国大学紀要』四九号
- ⑦ 田中敏生（二〇一八）『古今著聞集』の副助詞ダニとサヘ―中世説話集における〈相対的輕少性〉〈周縁波及性〉の意義の一確認（其三）―『四国大学紀要』五〇号
- ⑧ 田中敏生（二〇一九）「半井本『保元物語』の副助詞ダニ（附・サヘ）―中世軍記物語における〈相対的輕少性〉の意義の一確認―」『四国大学紀要』五二号
- ⑨ 田中敏生（二〇一九）「米沢本『沙石集』の副助詞ダニ・サヘ・スラー―中世説話集における〈相対的輕少性〉〈周縁波及性〉〈把同的極限性〉の意義の一確認―」『四国大学紀要』五三号

⑩ 田中敏生（二〇一九）『愚管抄』の副助詞ダニとサヘ―中世史論書における〈相対的輕少性〉〈周縁波及性〉の意義の一確認―『言語文化』一七号（四国大学）

⑪ 山田 巖（一九四二）「今昔物語集に於ける和漢両文脈の混在について」『国語と国文学』一八卷一〇号

⑫ 山田小枝（一九九七）『否定対極表現』（多賀出版）

⑬ 山田孝雄（一九〇八）『日本文法論』（宝文館）

（田中敏生 言語文化研究部門特別研究員）